

## 『涅槃經』と「無常偈」

森 山 結 希

## はじめに

無常偈は阿含や大乘經典に散見される偈頌である。阿含經典では『遊行經』の中で釈尊入滅後に、大乘經典では『大般涅槃經』(以下『涅槃經』) 聖行品の雪山童子の物語(以下、雪山求道物語)<sup>(2)</sup>に説かれる。無常偈は、「無常を説く偈」としての研究<sup>(3)</sup>、又は雪山求道物語への言及、經中で素材となる他經典の確定・推定など<sup>(4)</sup>を中心に研究されてきた。しかし管見の限りでは『涅槃經』における無常偈等の説話の素材の扱われ方については未だ十分に解明されていない。よって本稿は、無常偈が存在する經典の使用傾向を基に、『涅槃經』が説話の素材をどの様な意図で扱うのかを考察したものである。

## 一 『涅槃經』の「無常偈」

『涅槃經』には純陀品と聖行品に無常偈が存在する。

(一) 純陀品 純陀品では、純陀が釈尊への最後の供養を認め

られた後、文殊師利と純陀による問答が始まる。この問答は、純陀の「如来は無為である<sup>(5)</sup>」という答えに収束する。しかし純陀は、釈尊が涅槃に入る瑞相を示した後に「入滅しないで欲しい<sup>(6)</sup>」と、釈尊に請う。純陀に対し、釈尊は「その様な事を言っただけはいけない、私が今日、涅槃に入るのは貴方を含めた全ての者の為であり、これまで示してきた教えとの矛盾は無いだろう<sup>(7)</sup>」と述べた後に、純陀品の無常偈である「有為之法其性無常 生已不住 寂滅為樂<sup>(8)</sup>」を唱える。その後の説明の中で釈尊は如来の身体も無常であると説き、純陀を慰める。そして純陀は、「衆生の為に如来は方便として涅槃に入る」ことは理解していたが、己の感情を抑えられなかったと吐露した後、釈尊への供物を調える為に会座から去り純陀品は終わる。

(二) 聖行品 聖行品では、迦葉菩薩が『涅槃經』の受持と流布の誓願を建てる中で、自らの身を犠牲にしても『涅槃經』の教えを護持しようとする姿を表す。これに対して釈尊は迦葉菩薩に、諸の大菩薩に先んじて成道するとの授記を与える。

この後、釈尊の本生譚である雪山求道物語が語られる。この本生譚は、その昔無仏の時代、釈尊は雪山で修行する婆羅門だったという回顧から始まる。釈提桓因が婆羅門を試す為に羅刹に変じて、無常偈の前半部である「諸行無常 是生滅法」<sup>(10)</sup>を説くと、婆羅門は羅刹に偈頌の後半部を乞い、引換えに自身を食として羅刹の為に差し出すと約束する。後半部の「生滅滅已 寂滅為樂」<sup>(11)</sup>を聞き終り、偈頌を後世に残す為にその場の物に刻み付け、羅刹の為に木の上から身を投げる。すると羅刹は釈提桓因に戻り婆羅門を受け止め、他の天達と共に敬い、姿を消して物語は終わる。この物語を語り終えた後、かつては釈尊自身も己の身を犠牲にした護法の因縁によって、弥勒に先んじて成道したとする超越成仏を説明し、自らの本生譚が迦葉菩薩への授記の先例であることを明かして<sup>(12)</sup>、自行品は終わる。<sup>(13)</sup>

## 二 「無常偈」が存在する漢訳經典

無常偈が存在する漢訳經典は以下の通りである。

『長阿含經』（『遊行經』、大正二）、『般泥洹經』（同上）、『大般涅槃經』（同上）、『雜阿含經』（第五七六經・第九五六經・第一一九七經、大正二）、『別訳雜阿含經』（第一六一經・第三五〇經・第一一〇經、同上）、『過去現在因果經』（大正三）、『仏所行讚』（大正四）、『大般涅槃經』（大正十二）、『大般涅槃經』（同上）、『大

『涅槃經』と「無常偈」（森 山）

悲經』（同上）、『摩訶摩耶經』（同上）、『弥勒大成仏經』（大正十四）、『根本説一切有部毘奈耶雜事』（大正二十四）

〈「無常偈」の使用傾向〉

- 一、仏と一生補処菩薩の入滅がその舞台である。
  - 二、偈頌を唱える場面では、無常に関する説示がある。
  - 三、偈頌の唱者が釈尊もしくは帝釈天である。
- 以上の三点が無常偈を使用する經典に見られる傾向である。

## 三 使用傾向からみた『涅槃經』の「無常偈」

(一) 純陀品 『涅槃經』純陀品では経題の通り、釈尊の入滅という流れの中で説かれ、前節の三点の傾向全てに該当する。純陀品の無常偈は、仏身の無常を示すことが目的であろう。何故ならば、純陀品の冒頭では「如来常住」の提示のみを行い、その内容（秘密藏、常樂我淨など）は未だ開示されず、思想内容の開示は続く哀歎品以降にされていくからである。従って純陀品の無常偈は、釈尊の身体の無常を説明することが目的であり、他經典と同様の使用傾向である。しかし、純陀品冒頭では、仏身の常住が示され、また純陀が「如来は無為である」と述べている。つまり、純陀品の無常偈とは、釈尊の入滅という無常を強調し、改めて常住へと展開する流れを作り出すものであり、「入滅する仏が何故法身であり、無為であるのか」という問題を想起させ、続く哀歎品での比丘達への

## 『涅槃經』と「無常偈」(森山)

説法を引出し、『涅槃經』の思想を紐解く発端としての役割を担っていると思われる。

(二) 聖行品 聖行品には、無常偈の使用傾向が直接当てはまらないが、入滅の間際という經典を通じた場面設定や、無常の教えを基礎として「如来常住」という新たな思想を經典中一貫して説き続ける点から、間接的には傾向を踏襲している<sup>(14)</sup>と考えられる。聖行品の文中に見られる無常偈は他と異なり、捨身の決意を見せた迦葉菩薩の誓願と対となる形式で、釈尊自身の捨身の本生譚を紹介する必要により、偈頌が分割されている。これは正法護持という聖行の結果を、例を挙げて明確に示すという構成上の意図があったと考えられる。次に、前半部は無常を表すものとして理解できる。問題は捨身を行うう程に望んだ後半部である。純陀品の様に仏身の無常を示すのみではないはずである。何故ならば、聖行品に至るまでに『涅槃經』の主たる思想である、「如来常住」や「悉有仏性」などは示し終えているからである。傍証となるものを挙げる。

- ・ 物語中の婆羅門(釈尊)の設定として、菩薩行を修め、常樂我淨の法を受持し、大乘經典を求めていた。
- ・ 經典の文脈上、迦葉菩薩に対する授記の先例として雪山求道物語が示される。その事から、物語中の捨身を行い求めた法とは、『涅槃經』の教えと同内容と考えられる。

以上により、聖行品の無常偈後半部は、經典がこの品以前

までに明かしてきた、無為であり常住である如来の状態、仏の本性としての仏性を表しているのではないかと推定できる。

## まとめ

本稿では、『涅槃經』の構成素材の一つとして無常偈に注目し、無常偈が示される經典の偈頌の使用傾向を確認した。それにより入滅と無常の説示を無常偈に関連させて説く傾向が存在することが明らかとなった。これを踏まえると『涅槃經』は仏伝經典などの傾向を踏襲しつつも、教説に沿いつつ偈頌に新たな役割や価値を与えていると考えられる。又、『涅槃經』では二つの無常偈に別の役割を持たせて使用していると考えられる。純陀品の無常偈は、『涅槃經』の中心思想である「如来常住」を展開させていく発端としての役割を担わせ、一方の聖行品の無常偈は、『涅槃經』の教え(常樂我淨や仏性)そのものとして、經典の教えを通して修行した菩薩の超越成仏という成果の役割を担わせ、『涅槃經』の功德を誇示しようとしていると考えられる。

- 1 便宜上、『涅槃經』の品名は、曇無讖訳四十卷本(北本)を再治した三十六卷本(南本)を使用した。
- 2 〈北本〉大正十二、四四九b九―四五一a二七行、〈南本〉大正十二、六九一b三―六九三a二八行。
- 3 山田一九七三、村上一九八七、高橋一九八八など。

- 4 河村一九七二、一九七四など。
- 5 〈北本〉大正十二、三七四a二二—二三行、〈南本〉大正十二、六一三c—四行。
- 6 〈北本〉大正十二、三七五a二〇—二二行、〈南本〉大正十二、六一四c—五—一六行。
- 7 〈北本〉大正十二、三七五a二二—二四行、〈南本〉大正十二、六一四c—一六—一九行。
- 8 〈北本〉大正十二、三七五a二六—二七行、〈南本〉大正十二、六一四c—二—二二行。
- 9 〈北本〉大正十二、三七五a二八—b一行、〈南本〉大正十二、六一四c—三—二五行。
- 10 「諸行無常 是生滅法」〈北本〉大正十二、四五〇a—一六行、〈南本〉大正十二、六九二a—一三行。
- 11 「生滅滅為 寂滅為樂」〈北本〉大正十二、四五—a一行、〈南本〉大正十二、六九三a—一行。
- 12 「善男子。如我往昔為半偈故捨棄此身。以是因緣便得超越足十二劫。在弥勒前成阿耨多羅三藐三菩提。」〈北本〉大正十二、四五—a二七—b一行、〈南本〉大正十二、六九三a—二八—b二行。尚、この文脈で「超越成仏」と呼ぶことについては、横超一九八一（一六七頁）に依った。
- 13 釈尊自身の本生譚を、迦葉菩薩への授記の先例としたとする理解は、横超一九八一（一六七頁）において指摘されている。
- 14 『涅槃経』において「如来常住」が終始主張される思想であることは、横超一九八一、高崎二〇〇九、織田二〇一〇などで指摘されている。

『涅槃経』と「無常偈」（森 山）

〈参考文献〉

- 横超慧日『涅槃経——如来常住と悉有仏性——』（平楽寺書店、一九八一年）
- 織田顕祐『大般涅槃経序説』（東本願寺出版部、二〇一〇年）
- 河村孝照「大乘涅槃経所引の經典について」（『印仏研』第二〇巻第二号、一九七二年、五四—五九頁）
- 河村孝照「大乘涅槃経における説話の素材についての一考察」（『印仏研』第二二巻第二号、一九七四年、三八六—三八九頁）
- 高崎直道『高崎直道著作集第四巻 如来蔵思想の形成Ⅰ』（春秋社、二〇〇九年）
- 高橋審也「諸行の寂滅について」（『武蔵野女子大学仏教文化研究所紀要』第六号、一九八八年、一九—三〇頁）
- 長谷川滋「大般涅槃経の研究」（『密教文化』第一〇五号、一九七四年、二〇—三九頁）
- 村上真完「諸行考（Ⅰ）——原始仏教の心身観——」（『仏教研究』第一六号、一九八七年、五一—九四頁）
- 山田恭道「無常観」（『日本仏教学会年報』第三八号、一九七三年、二六一—二七九頁）
- 〈キーワード〉 雪山童子、本生譚、純陀品、聖行品  
（大谷大学大学院）